book café

的一なのか

選評

大阪大学大学院国際公共政策研究科教授 屖

野俊也

類は、 とり 模の大戦を2度までも経験 上でも最も根源的なテーマである 戦争と平和は、 わけ前世紀 戦争の惨害から将来 iz 国際関係を論じる 破壊的 な世 いした人 0) 世 界規 界

み出し、

措置を講じてきた。とは

に挑む愚は免れたが、

米ソ間

の冷た

なっているように感じられる。 行使される敷居は近年、むしろ低

域數据

がにそれを用いて第三次の熱い

大戦

核兵器を手にした人類は、

さす

際社会の対応を含め、

暴力や実力が

The Culture of Wa

和の

増進に向けた幾多の制度を編

を救」おう(国連憲章前文)と、

平

国へ 争と人道危機(民族・宗教紛争など) る 11 案を目の当たりにし、これらへの国 トワーク型の非国家主体による超大 けるアイデンティティー集団間 国家間の古典的な侵略や国内に した。そして冷戦終結後も、 対立は長期に及び、 ポストモダンのテロ攻撃 の非対称型の挑戦) 地的な紛争は世界各地で 通常戦力に といっ 世界 (ネッ た事 頻 の抗 Ü

戦争文化論



- -チン・ファン・クレフェルト (石津朋之監訳) 『戦争文化論』上・下
- 原書房
- 2010 年8月発行
- 四六判、上・377ページ、 下・345ページ

■定価各 2,520 円 (税込)

ぐる闘争が人間にとって自然状態だ のリアリストは権力(パワー)をめ のか。この問いに対し、ホッブズ流 では、人々はなぜ戦争をやめない

リストは国家間の利益(インタレス からだと説明し、カント流のリベラ ト)の対立や調整の失敗に原因を求 主体間の主観の一致度が社会的

ば、それぞれが主張する規範や理念 持つコンストラクティビストであれ

に構成されていくプロセスに関心を

(アイデア)をめぐる主体間の衝突に

戦争の味は蜜の味、

といったとこ

段(つまり、非平和的な手段)によ 思想家のクラウゼヴィッツは、人間 が政治的な存在である限り、別の手 着目することだろう。そもそも戦略

だと分析する。 る政治の延長として戦争は不可避 しかし、これらが、本当に人々が

> 戦争と手を切れない理由なのか。へ ブライ大学で軍事史と戦略論を教

に大胆に斬り込み、「文化」をキー 学界の定説やオーソドックスな解釈

て戦争は文化の1つなのであり、そ の戦争文化に人類は魅了されている。 ワードに全く新しい角度からこの問 いに接近する。すなわち、人類にとっ

だから、戦争は容易になくならな い、と。

ろだろうか。著者は、戦争を「集団 同士で行われる非常に複雑かつ暴

スポーツ性が宿り、戦闘の中で人々 に人間にとっての究極のゲーム性や 力的な形での格闘技」に例え、そこ える著者は、独自の戦略的観点から

る戦史の知識を縦横に用い、本書で

や武士のいでたち(伊達正宗の鎧兜部族のウォーペイントや中世の騎士 学、芸術のテーマに多く取り上げら は、また、戦争文化が、先史時代 れてきた様子が詳しく紹介されて などに反映され、これまでも歴史、文 も一例)から現代の軍の制服や儀式

いる。 もっとも、人類にとって戦争がい

れをすべて肯定してよいはずはない。 かに「魅力的」であったとしても、そ

他方で、自衛や問題解決に向けた最 今日の世界において、独善的な理由 による戦争はそもそも違法である。

められる場合には、それが言葉だけ 後の手段として正当な武力行使が認

払っても行動する主体は必要である。 ではなく、実際にリスクとコストを

精神性を見いだす。古今東西にわた

(特に男性)が興奮と刺激を味わう

は、 は大きく異なることは確かだ。 な理由に基づく行動とする立場と ワーやインタレストといった合理的 戦争を文化的現象と捉える視点 これを政治的現象と見たり、

を犠牲にさせる」と分析する。 向かわせ、必要であれば自らの生命 存在するという経験が人々を戦いに というもの、自らより偉大な何かが 立ち向かわせること、という。 象徴化し、兵士たちを積極的に死に 文化の機能とは、その大義を具現化 死ぬなど馬鹿げている。唯一、大義 著者は、「人々が『利益』のために 戦争

てのみ有用」と強調する点に戦争と 立場からの議論のように思えるが、 戦争文化は有用でない限りにお の逆説的な関係を著者は見抜 好戦的でエピキュリアンな

> 性によって抑えなければならない のなのである。 いている。 独善的な戦争は、本来、 理

論において新たに掘り下げていくべ き重要な課題といえよう。 できるのか。これは現代の戦争文化 度」を持ってこれに取り組むことが 用や武力の行使に対し、人間は そして、もう一つ。正当な軍の使 節

丹念に見直す 国際連盟、 、その歴史的 意義を



|2010年5月発行■新書判

296ページ■定価840円(税込)

には手厳しい。 0 歴史家は、 つまるところ、「第二 般に 玉 連盟

長)、

石井菊次郎

(連盟日本代表と

安達峰一郎

(常設国際司法裁判所所

担

新渡戸稲造

(連盟事務次長)、

当

|時の日本が常任理事国の|

翼を

後 世

> 戦に果敢に取り組む様子を鮮やか 動きも跡付けている。やはり、 に描いた本書から、この機関を通 際連盟が生まれ、その後の幾多の挑 序を構想する知的営為の中から国 かったことを実感させられる。 の国連が連盟なしには存在し への総合的な営みと捉えられてい 売買や難民、アヘン、知的協力など 家間戦争の防止にとどまらず、人身 性を再認識できる。 て編み出された種々の新機軸の が、予断を排し、大戦後の新世界秩 敗」という認識が強いからだろう。だ 次」の世界大戦を防げ得なかった「失 平和が単なる国 得な 今日 画 期

変と日本の脱退は連盟に試練をも ら日本人が縦横に活躍する様子は イタリア制裁や対フィンランド戦争 たらすが、エチオピア戦争に対する いかにも頼もしい。 して欧州の政治問題を巧みに処理 もちろん満州事

> を貫く姿勢も評価される。 に基づくソ連除名など、 連盟 が 源則

目で編まれた本書により、

後世の優れた歴史家の透徹 した

を得られたのではないだろうか。 はようやく歴史の中に正当な地位 国際連盟

がもどかしい。

新たな和平の道を探る 原理主義 の衝突が続 く中



のは甚だ不謹慎だが、 イスラームとイスラエルとアメリカ をよぎる。「セブン」は穏健派である。 ンの「スリーセブン」の難しさが頭 和 平の前進をギャンブルに例える スロ ットマシ

> 間の激烈な衝突が続く。 妥協的な精神世界に生きる人々の は容易に並び立ち、 ト教的十字軍意識と、それぞれに非 動とユダヤ教的シオニズムとキリス わないのか。逆に、 なぜこうも穏健派 ジハー 強硬な原理主義 同 士が ド唱道運 出 そろ

指摘し、 む中、 高の帰属意識になりつつあるためと が民族や国籍や文化を超越した最 著者は、これをグローバル化が進 宗教的なアイデンティティ その結果、互いの思い描く

> くの形而下の犠牲を生みだす 広げられていると分析する。 悲憤に導かれた がテロや軍事作戦にすり替わり、 の宗教観による原理的主義 「仮想戦争」 が繰 0) 形 逆説 衝 而 突 ŋ 上

それでも著者は希望を失わず、 でぶつかる露骨な差別には胸が痛 学者でムスリムの著者が越境を試 健派の政治参加を促す道を探る。 ラーム主義と民主主義の両立 の「アメリカン」大学や英国のパ たエルサレムの入国審査場やカイ いものがある。イラン系アメリカ人 だが、心の中の敵がい心には 一や穏 イ ス

たゆまぬ努力が期待される。 が、 運まかせのマシンでない (ほしの としや)

限り、

間